
遊戯王デュエルモンスターズGX—改竄された運命—

夙薙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王デュエルモンスターズGX―改竄された運命―

【Nコード】

N7380L

【作者名】

夙薙

【あらすじ】

突然、神を自称するビー玉に存在を消された一人の少女。

彼女が送られた世界は憧れの遊戯王の世界だった。

だがイレギュラーである彼女が歴史に加わったことで世界は大きく変貌するのだった。

第1話 試験は唐突に（前書き）

はじめまして、調子によって書き出しました！
後悔はしてません！

第1話 試験は唐突に

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

ああ・・・笑顔が眩しい・・・。

つてえ・・・何故に俺はここに？

いままで行われていたデュエルの様子を思い出しながら俺は過去を振り返ってみた。

―― 3時間前・・・

『すまん、我のミスにより貴様を無に帰してしまった。』

全く申し訳なさそうに言う変な声。

その発生源にあるのは小さな玉・・・だいたいビー玉ぐらいの大きさのだ。

とうるか俺は死んだんだ？

・・・待てやゴルア！！

まだ20にもなつてねえのに死ぬとかマジであり得ねえ！！満足できねえよ、この野郎！！

「おい、人を殺しておいて全くすまなそうじゃないのはなんでだ？」
こめかみをピクつかせながらなるべく穏やかに聞いてみる。

『貴様が弱いからいけないのだ。』

うん、ぶん殴る♪

とりあえず全力で殴ってみた。

結果・・・見事に負けました（笑）

うん、まがりなりにも神格の存在に殴りかかったって勝てる訳ないよな、俺のバカやろう・・・。

『気は済んだか？では詫びとして貴様の憧れの世界、遊戯王の世界で新たな生を受けるがいい。』

ビー玉のような神は問答無用で俺を絵札の中に叩き込んだのだった。

・・・勿論俺の意思なんか関係ないと切り捨てながら。

次会ったら必ずぶん殴る！

そんなこんなでいきなり遊戯王GXの世界に送り込まれたはいいのだが、タイミングが最悪だった。

何せ到着したら既に試験日だったからだ。

普通もうちよい余裕持たせるだろ・・・あの似非神め。

まあ筆記試験は死んだな。

だって基本的に効果が違いすぎるんだもん、俺は悪くねえ！！

だが実技ならモーマンタイ、余裕だぜって言えるよ。

何せ元々禁止だったはずのカードがこっちじゃ制限がほとんど。制限カードだったものなんか制限規制ないんだもん、余裕じゃねえか！

ってなわけで今に至る。

過去を振り返ってみた俺だったが、あまりのむちゃくちゃさに頭を抱えた。

そっぴい俺、鏡見てねえけどどんな顔してんだろ？後で確認するか。

『118番、実技試験を開始するノーネ！さっさとくるノーネ！』

おっと、窓際族になってたせいで呼ばれたの聞こえなかったな。
というかよりもよってアンタが相手かよ……。

「すまない、待たせた。獅童桜那だ。」
とりあえずフィールドに向かい悪びれずに言ってみた。

「ドロップアウトボーイ！お黙りなサーイ！ウォーターシーが相手をしてやるだけ有り難く思うノーネ！」
顔色の悪いひよろつとしたちよつと気持ち悪い先生、クロノスは地団駄を踏み怒りを露わにする。

ま、どうでもいいけど。

「どうでもいいけどデュエルしようぜ……？」
気怠げなキャラなのは昔から、デフォルトですから仕方ないのです。

「キイイーッ！ドロップアウトガールの分際で！！実力の差を思い知るノーネ！」

—— 決闘！！

クロノスLP4000

VS

桜那LP4000

「私のターン、ドロー！」

なんか理不尽な先攻のとられ方だが仕方ない、この世界ではこれがデフォルトなのだから。

「私は手札からフィールド魔法、^{ギア・タウン}歯車街を発動、これにより古代の機械と名の付いたモンスターの生贄を一体分少なくするノーネ！」

1ターン目から歯車街とか無いわぁ・・・

「私は手札から古代の機械騎士を召喚、更に二重召喚によりもう一度召喚権利を得るノーネ！」

あ、来たな・・・あの忌まわしいカード。

「古代の機械騎士を生贄に、古代の巨人を召喚するノーネ！私はリバースカードを一枚セットしてターンエンドなノーネ。」

勝利を確信したようにクロノスが笑う。

ム力つく・・・ねじ伏せることにした。

「俺のターン、ドロー。」

ふふふ・・・ここからはずっと俺のターンだ！

「手札から強欲な壺を発動、デッキから二枚ドロー。更に私はトレード・インを発動、手札の神獣王バルバロスを墓地に捨てデッキから二枚ドロー！」

会場がざわついている、無理もない。ここまで一気にドローするなど普通ならあり得ないからだ。

だが俺に常識なんて通じないんだぜ？それを今から思い知ってもらうからな？

「更に更に！手札から大嵐発動、これによりフィールド上の魔法罫を全て破壊する。」

クロノスの顔が忌々しげに歪む。

「歯車街が破壊されまシターガ、その効果により手札から古代の機

械工兵を守備表示で特殊召喚するノーネ！」

機械仕掛けの巨人とドリルを持つ機械兵か、だがそんなモンスターじゃ壁にもならねえぜ！

「更に、天使の施し発動！三枚ドロし二枚捨てる。リロード発動、五枚のカードをデッキに戻しシャッフル、そして同じ数だけ手札に加える。」

クロノスが呆気にとられている姿つてのはなかなかレアだな。

「手札から駿足のギラザウルスを特殊召喚！」

相手にも特殊召喚権限が生まれるが仕方ないか。
勿論クロノスは機械騎士を守備で特殊召喚した。

「手札から速攻魔法、地獄の暴走召喚発動！これにより俺はデッキからギラザウルスを二体呼び出す！」

「私は機械工兵を二体特殊召喚するノーネ。」

これでクロノスのフィールドは全て埋まった・・・これからが地獄の始まりだ！

「俺は手札から手札抹殺を発動、手札三枚を墓地に捨て三枚ドロ、今捨てた暗黒界の狩人ブラウ二体の効果により更に二枚ドロ！」
この段階でデッキが半分近く減った。

その加速度の速さに会場が騒然としているが俺には関係ない。

「手札から死者転生を発動、手札一枚を墓地に捨て神獣王バルバロスを手札に加える。そして三体のギラザウルスを生贄に、神獣王バルバロスを召喚！」

三体のギラザウルスが光となり新たなモンスターの出現するための門となる。

その門から現れたのはまさに神に等しい存在、威風堂々としたその姿に会場にいた全ての人間が吞まれていた。

『G U O O O O O ! ! ! !』

バルバロスはその巨腕を大きく広げ叫んだ。

その叫び声にクロノスは腰を抜かし古代の機械達は全て砕け散った。

「バルバロスは三体の生贄を捧げて召喚した場合、相手のフィールド上を一掃する効果を持つ！」

会場のざわめきが大きくなる。無理もない、先ほどまでボードアドバンテージはクロノスにあったのにバルバロスの出現により一気にボードアドバンテージが俺のものになったのだから。

クロノスなんか顔がひきつってるし。

「先生、呆気なかったな。」

俺は鼻で笑ってやった。

「う、うるさいノーネ！まだ終わってないノーネ！」

まだ諦めてないらしいがこれで終わりじゃないんだぜ？

「手札から二重召喚発動、これでもう一度召喚権限が発生した。俺はバルバロスを生贄に、偉大魔獣ガーゼットを召喚する。」

バルバロスが光となり新たなモンスターを呼び出す糧となった。

そしてその光から現れたモンスターは青い肌の逞しい四肢にデーモンのような顔をした巨大な鬼。

クロノスが顔芸を披露している。

どうやらガーゼットは予想外だったらしい。

「ガーゼットは生贄にしたモンスターの元々の攻撃力を倍にした数値を自分の力にする。従ってガーゼットは6000の攻撃力を得る！ガーゼットでダイレクトアタック！グレートタイフーン！」

ガーゼットの周りに竜巻が発生し、巨大な竜巻を作り上げクロノスを飲み込んだ。

「マンマミーヤー!!」

ガーゼットの攻撃によりクロノスのライフは0となり何故か吹き飛んでいった。

・・・ソリッドビジョンなのに。

俺がフィールドを立ち去っても会場は異常に騒がしかった。

「あゝ疲れた・・・」

机に突っ伏す俺、相変わらずデュエルは疲れる。

だがどうもそれだけじゃない気がする。

『当たり前じゃない、ずっと私がいるのに気付かないのだもの。』

何か聞こえるけど無視、まだ痛い子にはなりたくない。

『あらあ・・・無視?』

なんだか不機嫌そうになるが知ったこっちゃ無い。

そう、知ったこっちゃ無いのだ。

だからさっさと引っ込みな。そう思いながら無視していると不意に肩を叩かれた。

「・・・何? なにか用か?」

相手が誰かも確認せずに答える。

そいつは気を悪くすることもなく楽しそうに話しかけてきた。

「お前、さっきのデュエルすごかったぜ！まさかあの先生に1ターンで勝つなんて思わなかったぜ！なあ、俺とデュエルしようぜ？」

あゝ・・・この声は・・・

やっぱり十代か。

少し顔を上げてみた・・・ああ、その笑顔が俺には眩しすぎる・・・。

ん？

「なんで顔が赤いんだ？お前。」

なんだがガチガチに緊張して顔が真っ赤な二人を指差しながら理由を聞く。

片方は特徴が少ない空気男、三沢。

もう片方は将来化ける少年、翔だ。

十代も不思議がっているところを見ると、この二人がおかしいだけのようだ。

「まあいいけど。それよりお前、デュエルは入学してからなら受け付ける・・・今はだるい。」

俺がそう答えると十代は不服そうにしたが俺だって気分が乗らないのにデュエルはしたくないからな。

ここは無視でいい。

「なあゝデュエルしようぜ？なあゝ聞いてるのか？」

俺ね肩を揺する十代、諦めてはくれないようだ・・・。

ここはひとつはつきり言つてやろう。

そう思い顔を上げた。

思えばそれがいけなかった・・・何故なら・・・

「bjquetpavgat・・・」

俺と十代は言葉にならない衝撃を受けていた、まわりの人間も固まってるため会場内は一時的に静まり返った。

何が起こったのかこれを読んでる君達なら分かるはずだ。

定番の事故、振り向きざまに誤って口付けが発生したのだ。

勿論被害者は十代、そして俺の二人だ。

あ・・・やべえ・・・意識が朦朧と・・・。

side out

side 三沢

なんということだ・・・まさかまさかの事故が起きてしまった。

あのクロノス先生に勝った、遊城十代の獅童桜那二人がキスをしてしまった。

勿論事故であるのは明白だったが、相手が悪すぎる。

何せ遊城十代のほうはありきたりな美少年、見ようによつては美少女にも見える中性的な少年であるが、相手の獅童桜那は各が違う。

まず目を惹かれるのがその美しい黒髪、肩甲骨付近まで伸ばされた髪は艶やかでサラサラとしており風に靡く姿はまさしく芸術品だ。

次に目を惹かれるのは抜群のプロポーションだろう。何せ、あの天上院明日香と同じくらいグラマラスな体つきなのだ。

しかもそれでいて身長は160程度で、天上院くんよりも細く見える。

そして何より彼女の顔つきは常に気怠げであるが、デュエルの時に見せる凛々しさは見るもの全ての心を奪うだけの魅力がある。

そんな彼女とキスをするなど、はつきり言って羨ま・・・もって

のほかである。

俺の思考が復活してきたようで、徐々に身体が震えてきた。怖いんじゃない・・・これはそう、『憎悪』だ。会場内にいた多くの男子諸君が立ち上がり拳を慣らし始める。

——パタン

俺達が打倒十代をもくろんでいると間に彼女は顔を真っ赤にして気絶してしまっていた。

・・・正直言おう、萌えた。

ダンッ!!!

一人の生徒が机の上に立ち拳を掲げた。

「諸君、戦争は好きか？」

シンとした会場内によく響く声、俺達は思わず注目してしまった。

「諸君、私は戦争が好きだ。諸君、私は戦争が好きだ。諸君、私は戦争が好きだ。殲滅戦が好きだ電撃戦が好きだ打撃戦が好きだ防衛戦が好きだ包囲戦が好きだ・・・この地上で行われるありとあらゆる戦闘行動が好きだ。ライフポイントを大きく上回る攻撃力でダイレクトアタックするのが好きだ、バーン効果で何も解らぬまま力尽きる敵を見るのは心が躍る思いだ・・・強力なモンスターから身を守るため弱小モンスターを並べる様など感動すら覚える。

ライフが尽きた敵を延々と切り刻む姿などもうたまらない・・・！私が召喚したモンスターにバタバタと倒されていく雑魚の姿など最高だ！

なけなしの手札でオネストコンボを仕掛けてきたのを私のカウンタ―罠が潰し敵モンスターを木っ端みじんに粉碎したときなど絶頂すら覚える。

主の身を守るはずのモンスターが蹂躪されなぶり殺しにされる主の姿はとてもとても悲しいものだ。

諸君、私は戦争を・・・地獄のような戦争を望んでいる。諸君！私に付き従う大隊戦友諸君、君達は一体何を望んでいる？更なる戦争を望むか？情け容赦ないクソのような戦争を望むか？」

大げさなまでの身振り手振りをつけながら話すソイツの言葉に俺達は次第に吞まれていった。

そして自然とこう口にした。

「クククク！ククク！ククク！」と・・・。

ソイツは満足そうに頷き再び話し出した。

「よろしい、ならばクククだ。我々は満身の力を込めて今まさに振り落とさんとする握り拳だ。だが、我々のアイドルの唇が奪われた今、ただの戦争では最早物足りない！大戦争を！一心不乱の大戦争を！我らは僅か一個大隊、千人に満たない敗残兵に過ぎない。だが諸君は一騎当千の古強者だと私は信仰している。奴に我々の思いを思い知らせてやる！さあ諸君・・・地獄を作るぞ・・・？」

その後のことはよく覚えていない。

気づいたら自分の身体がスタボ口であること以外何も分からなかった。

side out

side 桜那

あの後目を覚ましたら会場はなんだかくちやくちやになっていた。

戦争でもあったか？だがそれにしても俺のまわりだけは荒れてないから多分みんながはしゃぎ過ぎたんだろう。
帰宅しよう、そうしよう。

数日後

試験の結果は筆記試験は壊滅的だった。実技は満点だった。
とりあえず寮はオシリス・レッドとなったのだが、あの寮に女子って誰か居たか？

俺は不安にかられながら寮に向かった。

そして・・・再び会った、十代に。

ああ、逃げ出したい・・・。

事故とは言えキスしてしまったのだ…はっきりに言って俺は気まずい。
どうしよう…。

とりあえず

逃げよう

俺は脱兎のごとく逃げ出した。

第1話 試験は唐突に（後書き）

お疲れ様でした。

まず主人公は女で一人称は俺、性格はダルがりで結構クール。
デュエルの際は凛々しさが普段の十倍のため、なかなか漢らしいところがある。

好きなカードはネフティスとエンド・オブ・アヌビス。

身長は158cm

体重は――

スリーサイズはボンツキュッポーン
長く美しい黒髪が自慢

モデルは美遊・エーデルフェルト

なお一般常識とは乖離した世界の人間であるため普通ではない。

そしてドロー加速型のデッキとパーミッションをこよなく愛する。

みてみんなはパソコンからしか無理なので桜那をピクトに掲載してみました。

<http://n.pic.to/16nu4t>

第2話 精霊との出会い（前書き）

こんばんは。

感想で指摘してくださった方々、ありがとうございました。
修正しておきました。

なおこの小説ではOCG効果とアニメ効果が入り混じる予定ですの
でアニメ効果である場合アニメ効果表記が入ります。

第2話 精霊との出会い

拝啓、前のお母さんへ

娘は新しい人生をそれなりに堪能してます。

開始そうそうファーストキス（多分）を奪われましたが遅しく生きてます。

親不孝な娘でごめんなさい、お母さんはどうか元気にしていて下さい。

短いですけどこれで終わります。

願わくば次に生まれ変わる時もまたお母さんの子供でいたいです。

.....

十代に遭遇して思わず割り当てられたら部屋に逃げ込んで鍵を掛け引きこもり、外界との接触を絶った俺は全力で現実逃避していた。

うん、普段母に手紙なんて書かないしこんなに綺麗な話し方をした覚えはない。

どうやら俺もちゃんと育っていたなら普通に話せるようだ。

.....別に今の話し方とかを気にしたりはしないんだけどな。

side out

桜那が手紙を備え付けの机の引き出しにしまい、ベッドに身を預ける。

『なかなか乙女チックな文章だったわね。私が男だったらギャップ萌で落ちてたわね。』

なんかまた聞こえるなあ、と桜那は思いながら無視をしていると不意に四肢が拘束されるのを感じていた。

感覚的に何かが乗っているような感じがした彼女は、恐る恐る自分の上に乗る何かを確かめるべく目を開いた。
するとそこには

『あ、やつとこつちみた。』

少し変わった民族衣装に身を包み頭に鳳凰のサークレットを付けた少女がいた。

「・・・ネフティスの導き手？なんでここに・・・というかデュエルディスクにセットもしてないのになんで出てきてるんだ・・・？」
それは紛れもなくネフティスの導き手であった。

桜那の思考回路が焼け切れるのではないかと思うくらいに全力で回転するが意味が分からなかった。

ひとまず、彼女は導き手に退くよう言おうとしたが遅かった。

「ひゃう！？ちよつ、何して・・・！！」

『いやあ、今まで無視してくれたお詫びを頂こうかと。』

何故なら導き手によりセクハラされ始めたからだ。

導き手はその細くしなやかな四肢を巧みに操り桜那の体を弄ぶ。

それに伴い桜那が抵抗しながら、ふあああつだとかからめええつだとか漏らすため、隣の部屋に暮らす男子生徒がイロイロ大変なことになっていた。

小一時間は経っただろうか。

桜那の部屋には頬を桃色に染め、はあはあと荒い息遣いをする桜那と満足そうな表情で肌がツヤツヤした導き手がいた。

それから更に10分後、なんとか回復した桜那はさめざめと泣きながら導き手に質問していた。

「結局、なんで導き手がここに？」
泣きながらの質問なため、導き手がいじめっ子か何かに見えるが気にしてはいけない。

「ん、まあパートナーだからね。桜那、あなた昔から私を使ってきたじゃない？だからあなたの思いとかが私のカードに力を与えたのよ。」

至極当然そうに言う導き手だが、既に異常であることに桜那は気づいていた。

何故なら前にいた世界にもデュエルモンスターズは存在したが、この世界ほど生活に密接したものではなかったのだから。

そのためカードの精霊が存在できる余地も無いし、そもそも全く同じカードが幾億も存在する世界でそういったことはあまり望めない。そしてなによりあの世界では物としてしか扱われない。

そんな世界で精霊が存在出来るのだろうか？

いや、そもそも存在出来たとしても相性は最悪だろう。

精霊の分身といって差し支えないカードは希少価値が高くなければ大概そんざいに扱われる。

精霊からすれば腹立たしいことこの上ないはずだ。

それなのにこの精霊は彼女をパートナーと呼んだ。

それがどうしても桜那には理解出来なかった。

『理解できない』

導き手が意地の悪い笑みを浮かべて桜那にそう言つと、彼女はキョトンとした表情で導き手を見つめた。

「……って顔してる。まあ無理もないわ……だって普通なら自分の分身を手荒に扱う世界の人間のことを好きになるわけないものね。」

さも可笑しそうにクスクス笑う導き手だったが不意に真面目な顔で

話し出した。

『でもね、私達からすれば貴女以上に素晴らしいマスターは存在しないの。』

だって貴女はシンクロ召喚という傍若無人な召喚方法が世界を侵していくなかで私達を選んで使ってくれた。

そして誰よりもカードを愛し大切にしてきた。

私達にとってこれ以上ないくらいの幸福を貴女は与えてくれたうえに、あらゆるデュエルに勝ち続けてくれた。

だからマスターを私達は選んだのですよ。』

本当に嬉しそうに語り笑う導き手を見ると不思議と桜那も笑顔になっていった。

いまだに自身が本当に精霊たちに相応しいかは分からないが、それでもいいと桜那は思っていた。

何故なら精霊たちは彼女からすれば大切な【お友達】なのだから。

しばらく二人で笑いあっていると、桜那に手を差し出す導き手があった。

多分、これからもよろしくという意味なのだろう。

桜那がその手をとろうとしたまさにその時、今までの雰囲気はぶち壊しになった。

『『『『『導き手よ、抜け駆けは許さん！！！！』』』』』』

大量に精霊が現れ導き手をプチッと押し潰してしまったからだ。

しばらく呆然としていた桜那だったが、精霊たちの息のあった登場や行動に思わずプツと笑いつてしまい最終的には楽しそうに笑っていた。

その笑顔は愛らしく、この笑顔は守らなければならぬとこの場にいた者全てが思った。

・・・以上が私、虚無の統治者の見た事象の顛末である。

此度のマスターは幸せであると思う・・・マスターを昔からよく知る私だから余計にそう思う、なにせ昔の彼女には生氣というものが感じられなかった。

彼女は籠の中の鳥だったから。

以前の彼女には友人などおらず、尚且つ許された娯楽など貴族の行儀乗馬などといった上品なものを抜いてしまえばデュエルくらいしかなかった、そしてそのデュエルさえもあまりよい顔はされず幾たびもカードを破棄されそうになった。

彼女の親は彼女を飼い殺しにし、いずれ自分を養う“駒”のひとつとして彼女を育てていたのだ。

もちろん我々精霊一同も彼女を飼い殺しにさせないために努力はした。

だがあの世界で我々精霊が力を行使することは難しかった。

我々にできたことなどせいぜい小さなポルターガイスト現象程度だ。それも小さめの皿一枚が限界では何も出来ないのとさして変わりはないかった。

あの腐れ玉が彼女を殺害したときは世界を滅ぼしてやろうかとも思ったがなかなかグッジョブな仕事をしてくれた今では感謝している。何せ我々はいかに彼女と話し、そして力となれるのだ・・・彼女を泣かせることは我々が断じて許さん。たとえそれが精霊と心通わせたあの少年でもだ。

彼女は強い・・・だが時に無力だ、だから我々は彼女の剣となろう。全ての悪を切り捨てる剣に。

精霊がじゃれあうのをしばらく見ていたのだがドアをノックする音がしたため桜那はドアの方に向かい開ける。
するとそこには遊城十代がいた。

「なあ、デュエルしようぜ！」

開口一番にデュエルの申し込みをする十代、おそらく学園中を探しても開口一番にデュエルを申し込むのは彼ぐらいのものだろう。

桜那は仕方ないと考え首肯した。

この手の人間は断ると理由をしつこいくらいに聞いてくるからだ。
デュエルディスクを持ちレッド寮前の広場でデュエルを受けることにした。

「へへっ、ワクワクしてきたぜ！楽しいデュエルにしようぜ！」

「・・・そうだな。」

片やはいテンションに、片やローテンションに言い二人同時にデュエルディスクを起動させ展開する。

「決闘——デュエル——！！」

「先攻はもらう。ドロー。」

十代に有無を言わず即座にドローする桜那、十代は先攻を取るきでいたらしくポカーンと間抜け面をさらすが、桜那はお構いなしに手札を確認し戦術を組み立てる。

「・・・よし、俺はモンスターをセットし場にカードを一枚セット、ターン終了。」

セットモンスター×1

伏せカード×1

手札×4

ライフ4000

「俺のターン、ドロー！」

勢いよくドローする十代、桜那は毎回あんなに勢いよくドローして大丈夫なのだろうかと思議に思うが、あのペガサスや海馬の作ったカードは異常に頑丈なのを思い出し、一人納得したように頷く。

「俺はバブルマンを召喚する！」

十代の場に体格のいい水色の衣装を身に纏ったヒーローが出現する。
「バブルマンはフィールドにバブルマン以外にカードが存在しない場合、二枚ドローすることが出来る。ドロー！」

十代の手札が七枚となる、これに関しては止めようがないらしく渋い表情になる桜那だが今は耐えるしかないらしい。

「手札から魔法カード、ヒーロー・マスク発動！このカードはデッキからE・HEROと名の付くモンスターを一枚墓地に送り、自分フィールド上のモンスター一体を墓地に送ったモンスターと同名カードとして扱う！俺はネクロダークマンを墓地に送りバブルマンをネクロダークマンとして扱う！」

一瞬のうちに融合召喚や上級モンスターの召喚環境を作り上げていく十代、なんとも恐ろしいデュエリストである。

「そして、融合を発動しネクロダークマンとなったバブルマンとスパークマンを融合！現れる、E・HEROダーク・ブライトマン！」
バブルマンとスパークマンが融合のカードに吸い込まれカオスの領域から一体のヒーローが現れた。

そのヒーローは金色の鎧を身に纏い全身が黒く赤いマスクを被ったヒーロー、攻撃力はさほど高くはないが効果が厄介なモンスターである。

「ダーク・ブライトマンでモンスターに攻撃！ダーク・フラッシュ！」

ダーク・ブライトマンが攻撃しようとした瞬間、何故か身体を硬直させダーク・ブライトマンが動かなくなった。

「な、なんで攻撃しないんだ!？」

焦る十代だが桜那のフィールドに答えはあった。

「リバーズカードを発動したんだよ、畏れカード威嚇する咆哮をな。」
桜那がニヤリと笑うと十代は嬉しそうに笑った。

「やっぱ、強いな桜那は！俺はカードを二枚セットしてターンエンド。」

攻撃モンスター×1

ダーク・ブライトマン

伏せカード×2

手札×3

ライフ4000

「俺のターン、ドロ。・・・悪いが十代、このターンで決めさせて貰う。俺は魔法カード強制転移を発動、互いに一体しかモンスターが居ないからそのまま交換だ。」

「なっ!？俺のダーク・ブライトマンが!」

十代の場にセットモンスターが、桜那の場にダーク・ブライトマンが現れたことに驚く十代。

だがこれで終わらないのが桜那である。

「俺は手札から太陽の書を発動、これによりセットモンスターを表側攻撃表示にする。反転しろ、メタモル・ポット!」

太陽の光に当てられたらセットモンスターがたまらずに反転し攻撃表示となる。

「これにより互いに手札を全て捨てて新たに五枚のカードをドロする。」

十代に新たなカードを五枚も与えるのがいかに危険なことか桜那は知っている。

だが十代のデッキにある防御系の罠は自分の場にヒーローが居なければ機能しないものばかりであるため、このターンの心配はほぼ無用であると考えていた。

「この瞬間、メタモル・ポットによって墓地に捨てられた暗黒界の武神ゴールドを特殊召喚する！そして相手のカード効果で墓地に捨てられたゴールドは相手のフィールドに存在するカードを二枚まで破壊できる。俺は十代のフィールドに伏せられたカード二枚を破壊する。」

これが通れば勝ちが決まったも同然である。

が・・・

「破壊されるまえにリバースカードオープン、和睦の使者！これでこのターン、俺のモンスターは戦闘では破壊されず戦闘ダメージも0になるぜ！」

十代が意外なフリーチェーンタイプの罠をデッキに投入していたためデュエルがこのターンで終わることは無くなった。

「・・・フリーチェーンの罠、十代・・・その罠は新しく入れたのか？」

桜那が驚きを隠せないくらい驚いたらしく、目を見張りながら聞いた。

「ああ。三沢がさ、もしも桜那とデュエルするならフリーチェーン

の罠を投入しておいたほうがいって教えてくれたんだよ。まさか本当に役に立つとは思わなかったぜ！」

笑いながら嬉しそうに教える十代。

どうやらこの罠は三沢の入れ知恵らしいが、初手で桜那のコンボをガードできるカードを引き当てる十代のデュエルセンスはさすがというべきか。

だが桜那もこれで終わることなどありえない。

「俺はリバーズカードを四枚セット、そしてモンスターをセットしてターン終了。」

攻 ダーク・ブライトマン攻 暗黒界の武神ゴールド

セットモンスター×1

リバーズカード×4

手札0

ライフ4000

「俺のターン、ドロー！」「この瞬間、罠カード、強烈なはたきおとし発動！」

十代がドローしたカードが巨大な手にはたき落とされ墓地に捨てられた。

「くっ、俺は手札から融合発動！バーストレディとフェザーマンを手札融合！現れる、フレイムウイングマン！」

十代のフィールドに全身が緑色で片腕がドラゴンヘッドのヒーローが現れた。

「そして強欲な壺発動！二枚ドロー。手札から魔法カードホープ・オブ・ファイフ発動！バブルマン、エッジマン、ワイルドマン、スパークマン、バブルマン・ネオをデッキに戻し二枚ドロー！」

十代の手札が一気に変動していく。
ここから十代の追い込みが始まった。

「墓地のネクロダークマンの効果で一度だけ生贄なしで上級ヒーローを呼び出すぜ！現れる、E・HEROエッジマン！更に魔法カードOオーバーソウル発動！蘇れ、バーストレディ！」
十代の場に金色の鎧を装着したヒーローと炎を象徴する女性ヒーローが現れる。

「いくぜ！手札からRライトジャステイス発動！ヒーローの数だけ相手のリバースカードを破壊する、三枚全て破壊だ！」
三体のヒーローから放たれた裁きの光が桜那のリバースカードを焼き尽くし破壊する。

「さあ、最高のデュエルを見せてやるぜ！フィールド魔法、摩天楼スカイスクレーパー発動！」
広場だった場所に突然ビル群が立ち並び一番高いビルにフレイムウイングマンが、その少し後ろにある大きなビルの上にエッジマン、そしてバーストレディは十代のまえてファイティングポーズをとっていた。

「さすが十代、まさかここまで一気にモンスターを揃えてくるとはな。」

先ほどまでフィールドにいたのはメタモル・ポットだけだったというのに、今では十代のフィールドには三体のヒーローとメタモル・ポットと、四体ものモンスターが揃っている。

手札消費がバカにならないデッキだというのにこの回転率は卑怯だと桜那は思うが、自分もさして変わらないことを思い出し苦笑いが漏れた。

「へへっ、いくぜ！まずはフレイムウイングマンでゴールドを攻撃！スカイスクレーパーシュート！」
フレイムウイングマンがビルから飛び降りゴールドへと急接近する。
通常であればゴールドの巨腕がフレイムウイングマンを粉砕するのだ

がスカイスクレーパーで戦うヒーローは一味違う。

「スカイスクレーパーの効果で自分より強い敵とバトルするとき、ヒーローの攻撃力は1000ポイントアップする!」

フレイムウイングマンのもつドラゴンヘッドの腕に火が纏われ、ゴルドを切り裂き、その余波で桜那のライフを削った。

桜那

ライフ

4000 ↓ 3200

「フレイムウイングマンが相手モンスターを破壊したとき、相手にその攻撃力分のダメージをあたえる!」

フレイムウイングマンが桜那に近づきドラゴンヘッドから炎をはき、ライフを大きく削りとった。

桜那

ライフ

3200 ↓ 900

「エッジマンは相手の守備力が自分の攻撃力より下だった場合、貫通ダメージをあたえる!」エッジマンでセットモンスターに攻撃だ! パワー・エッジ・アタック!」

エッジマンがセットモンスターに飛びかかるとセットモンスター、全身が青いいかにもモンスターというような見かけであるハンニバル・ネクロマンサーが姿を現すがエッジマンは難無く破壊し、桜那へと貫通ダメージを与えた。

桜那

ライフ

900 ↓ 100

「楽しいデュエルだったぜ、桜那！スカイスクレーパーの効果を使ったバーストレディでダーク・ブライトマンに攻撃だ！」

バーストレディの目が怒りに燃えていたためダーク・ブライトマンは反撃することが出来ないまま業火に焼かれ桜那のライフは尽きたのだった。

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

お決まりの台詞とポーズをとった十代。

桜那は負けたというのに微笑んでいた、それほどに十代とのデュエルは楽しかったようだ。

（変な世界だな、OCGの効果だったりアニメ効果だったり・・・
ややこしいことに巻き込まれないといいが）

桜那がそう考えながらデュエルディスクを待機形態にしたところでハッと何かに気づいたかのように顔を上げる。

顔を上げると辺りに沢山の生徒がいた。

どうやらデュエルの途中から集まってきたらしいが暇なのだろうか
と考えずにはいられない桜那であったが、その思考は途中で遮られることとなった。

「君が獅童桜那くんだね？実は君に謝らなければならないんだ。」
このデュエルアカデミアにおいて最高責任者である校長が現れたからである。

「実はこちらの手違いで君の配属をオベリスクブルーではなくオシリスレッドにしてしまったのです。大変申し訳ありません。よって

獅童くん、君の配属は只今をもってオベリスクブルーとします。」
有無を言わず校長は決定した。

はつきりいつて桜那には唐突過ぎて理解出来なかったが、オベリスクブルー所属の男子が雄叫びを上げたことで思考回路が高速回転しはじめた。

（え？なに？手違い？オベリスクブルー？女子寮？マジで？・・・
なにiiiiiii！？）

桜那が驚いた表情で固まるなか、一部の者達の行動は早かった。

「良かったわね、あなた。オベリスクブルーには女子寮があるからこれで貞操の危機が無くなったわよ。」にこりと笑いながら言う少女、たしか明日香と一緒にいることが多いジュンコとかいったっけ？と桜那は考える。

「さあ、早速お着替えですわっ」きつとお姫様みたいな服が似合うとおもいますわっ」

ももえとかいう少女が言う。

一体何を着せるつもりなのかは分からないが桜那に拒否権はないよ
うで、ももえとジュンコによって腕を絡め取られ桜那は拉致されて
いった。

なお、桜那がいなくなったあとオベリスクブルー男子対ライイエロ
ー対オシリスレッドの三つ巴の大戦争があつたのは言うまでもない。

第2話 精霊との出会い（後書き）

今回はどうでしたか？

守備力1900程度のモンスター探すのに必死になった作者ですが、ハンニバル・ネクロマンサーをチョイスしたのはなんとなく悪っぽかったからです。

それ以上の理由は存在しません。

第3話 風の谷に生きる者（前書き）

お待たせいたしました・・・今回でてくるある変態のデッキがどうにも固まらず苦戦してしまい長らく更新できませんでした、申し訳ないです・・・。

もしかしたら誤字脱字があるかもしれませんが第三話、どうぞ。

第3話 風の谷に生きる者

結局レッド寮ではなくブルー寮に配属されることとなった桜那だがはつきりいつてブルー寮の部屋は広すぎて彼女は落ち着けないのだが、既に部屋が決まってしまった以上自分に変えられることはないという割り切留ことにしたようだ。

「手違いとか有り得ないよな、普通・・・だけど起こった。修正力か？修正力なのか？」

一人ブツブツ天井に向かって呟いていると何故か廊下の方が騒がしくなっていた。

なんなのかと廊下に出てみると明日香が鬼気迫る顔で歩いていた。

「何かあったのか？」

話しかけるのはなんだか恐かったが意を決して話しかけるが明日香は答えなかった。

代わりに桜那の首根っこを掴み引きずりながら歩き始めたのだった。もちろん彼女も悪気は無いのだろうが、気がたっているらしいので桜那は我慢することにした。

それにこの行動には思い当たる節がある、この日は確か・・・――

『違うッス～～～～！』

何やら断末魔のような叫び声が聞こえてくる。

どうやら“当たり”のようだ。

今日は丸藤翔が覗きの容疑で捕まる日なのだ。

「あゝ・・・何？今の。」

桜那は苦笑いがかみ上げてくるのが分かった。

なにせ何があったかは解っているのだ、仕方ないことだろう。

「覗き魔が現れたのよ、一晩に二人もね。」

「二人も・・・だと？」

思わず啞然としてしまう。

それもそのはず、本来なら捕まるのは一人のはずだからだ。

「女子と覗き魔が騒がしくやってるのよ、さすがに私だけじゃ止められないから貴女を連れてきたの。解って貰えたかしら？」

非常に解りやすい説明ありがとうございます、しかし桜那は納得していない。

女子だけなら明日香一人で鎮めることが出来るだろうから、自分が鎮めるのは覗き魔二人ということになるからだ。

覗きをするような人物と知り合いになった覚えはないが、ここまで来てしまえばもう何とかするしかないと割り切って顔を上げるとそこには確かに丸藤翔がいた。

だがもう一人は爆弾と変わらなかった。

何故ならもう一人の癖っ毛なのにそれでいて柔らかそうな髪に繊細なイメージを抱かせるその人間は入試デュエルの時や十代とのデュエルの後^に他の人間を煽動し暴走していた人物だったのだ。

「やめるツスー！！！！僕は何もしてないツス、無実ツス！その変態と一緒にしないで欲しいツスー！！！！」

叫ぶ翔。

「ええい、貴様等女狐の裸体になど興味はないわ！俺が興味あるのは桜那さんの裸体だけだっ！！」

力強く宣言する変態。

もしここで自分が姿を現した時、彼が縄を引きちぎり近寄ってきたらと思うとあまり気が乗らない桜那であった。

「・・・はあ、しゃあない・・・解決策は頼むぞ、明日香。」
肩を落とし彼等のもとに歩いていく。

すぐに変態と翔は近づいてくる桜那と明日香に気づき、呼びかけようとしたが何故か声が出せなくなっていた。

理由は単純明快、桜那の制服姿に問題があった。

着ている制服は明日香と同じもののだが、明日香のようにコスプレのように見えず、その制服が桜那のために存在するかのごとく似合っていたからだ。

魅せるべきところを大きく見せ、細く魅せるべきところはキュツとしめるというある種の職人技とでもいうべきか。

「な・・・なんという存在感・・・僕なんかそこいらに生えてる雑草のようッス・・・」

「なんだ・・・これは・・・そんな・・・」

呆然とする翔と縛り上げられている状態で立ち上がり震える変態。

「おおお・・・おおおっ！！」

震えながら身体に力を込める変態、その場にいる誰もが冷や汗を流す中で変態は縄を引きちぎりデュエルディスクを展開した。

「桜那さん、俺とデュエルして下さい！」

ぽかんと口を開け呆ける桜那。

「俺は一目見た時からあなたに惹かれていた、そんな俺の前でそんな格好をされてまだ黙っているなんて出来るものか！桜那さん、あなたはデュエルしている時、誰よりも輝いて見える！誰よりも、誰よりもだ！だから今この場でその輝きを見せてくれ！」

力強く叫ぶ変態、言っていることがたまに変態的なものではあったが、それ以外は単に桜那の中にある不思議な魅力に惹かれたことで自然と口に出しただけのように感じた桜那は思わず苦笑いしてしまう。

「ああ、分かった。デュエルしようじゃないか。」

デュエルディスクを構える桜那。

「ありがとうございます！上條憂、かみじょう・ゆう出るぞ！」

ディスクを胸の前に持ち上げる憂。

話についていけずにおいて行かれた外野。

今、デュエルフィールドという名の戦場に二人の戦士が現れた。

デュエル
決闘！！

桜那 LP 4000

VS

憂 LP 4000

「俺のターン、ドロー！」

桜那が素早く先攻を取りドロー。

「手札から手札抹殺を発動！全ての手札を捨て新たに捨てた枚数と同じだけカードをドロー！」

初手からの手札総入れ替えカード、この世界では手札事故と判断されるこの効果だが桜那にとっては違う。

墓地が増える度に戦術の幅が広がる・・・フィールド上のあらゆる場所を使いデュエルするのが彼女の特徴なのだ。

そして今使っているデッキは桜那という一人のデュエリストの姿を映し出すには最高のデッキ、色々なデッキの中で彼女が最も愛したデッキ・・・それが

「手札より『ドラグニティ』ドウクスーを召喚する！」

桜那のフィールドに現れる白い服に鳥を模した兜、そして燕のような翼をもつ戦士。

「ドラグニティ・・・初めて見るカードだ。」

憂が呟く。

それもそのはず、ドラグニティは本来ならこの世界にはまだ存在しないはずなのだ。

その存在しないはずなのデッキを使えるのは単に桜那がデッキを愛していたからに過ぎない。

「ドラグニティードウクスの召喚に成功した時、墓地にあるドラグニティの三ツ星以下のドラゴン族モンスターをこのカードに装備カード扱いで装備することができる！ドウクス！」

主の呼び掛けにドウクスは頷いて答え、左手に持つ祈祷用の杖を振る。

すると地面から澄んだ水色の槍が姿を現しドウクスの右手に収まる。

「ドウクスはフィールド上に存在するドラグニティの数だけ攻撃力を増す、今いるのはドウクスと装備されたブランディストックの二体、よってドウクスの攻撃力は1900ポイントになる。私はカードを二枚セットしてターンを終了する。」

桜那

ドラグニティドウクス

ATK1900

魔法・罾セット二枚+ブランディストック

4000/2

「俺のターン、モンスターをセットしてカード二枚セットでターン終了。」

憂

セットモンスター一体

魔法・罾セット二枚

4000/3

何もしてこない憂に対して僅ばかり疑問を感じるが、ドラグニティの前ではそれではダメなことを桜那だけが知っている以上仕方ないのだろう。

それでも桜那は手は緩めない、それは相手に失礼なことだからだ。

「私のターン、リバーズカードオープン！八汰鳥の骸、これにより私はカード一枚ドロ。手札からドラグニティレギオンを召喚、レギオンは召喚に成功したときドウクスと同じくドラグニティの三ツ星以下のドラゴン族を装備することができる！」

白い服にアホウドリねような翼を持つ逞しい戦士、レギオンが地面に腕を埋め込み引き抜くと、その手には黒く穂先が幅広で柄の部分が後ろにいくにつれて細くなっている槍を持っていた。

「また増えた・・・ドラグニティ、面白いカード達だな。」

憂は他人ごとのように言うが忘れてはいけない、ドラグニティには必ず特殊能力があることを。

「レギオンとブラックスピアが増えたことによりドウクスの攻撃力は2300になる。更にリバーズカードオープン！血の代償、ライフを500ポイント支払い手札からドラグニティ―アキュリスを召喚！」

桜那のフィールドに赤い体に銀の鎧を纏う小さな竜が現れる。

アキュリス

ATK1000

「うん？そんな攻撃力の低いモンスターでなにをするつもりだ？」
呆れたかのように首を横にふる憂。

「攻撃力ばかりが全てじゃない、ドラグニティはその強い結束力で全てを凌駕する！アキュリスの効果発動、召喚に成功したとき手札からドラグニティ―体を特殊召喚しそのカードにアキュリスを装備する。現れる、ドラグニティ―プリムス・ピルス！」

桜那のフィールドが徐々に埋まっていく。

今度現れたのは手に鞭をもつよくわからない鳥を模した兜をつけた背の高い戦士、その戦士も効果を持つらしく鞭を地に何度も叩きつけ天より武器を呼び寄せていた。

「プリムス・ピルスは鳥獣族のドラグニティ―体を対象にドラゴン族ドラグニティを装備するカード、アキュリスをデッキから呼び寄せレギオンに装備！更に、プリムス・ピルスを生贄に捧げドラグニティ―アームズ―レヴァティンを特殊召喚！」

アキュリスを腰に持っていたプリムス・ピルスが光となり新たなモンスターが姿を現す。

「こ、これは・・・！」

憂が目を見開き見上げるモンスター・・・その姿は八つ星モンスターとは思えない程に神々しく、あらゆるドラゴン族モンスターより格上の存在に見えた。

ドラグニティアームズーレヴァティン

ドラグニティにおける長とも言うべき最高の能力と力を持つドラゴン族ドラグニティ。

特徴的な橙色の身体に美しい翼をもち、その手には黒い大剣を常に携えている。

一目見れば決して忘れることの出来ないその姿に皆が見惚れている中、レヴァティンがアキュリスの力を墓地から引き上げる。

どうやらアキュリスを装備したらしい。

「レヴァティン、セットされてるモンスターに「畏カード、威嚇する咆哮発動」・・・くっ」

「これにより攻撃宣言することは許されない！」

桜那の攻撃が発生することなくターンは終了することになった。

「今から俺のとおっておき、見せて上げますよ！ドロー、手札から死者蘇生を発動し墓地からデモニック・モーター・Ωを蘇生！そして手札からエンジンチューナーを発動しΩに装備、これでΩの守備力の半分が攻撃力に加わり3800だ。いけ、Ω！レギオンを叩き切れ！デモンズブレイク！」

憂の召喚したデモニック・モーター・Ωがレギオンを四つ切りにしその余波が桜那を襲う。

3500↓900

「このカードはエンドフェイズ時にモータートークンを一体作り出す、ターン終了。」

憂の場に小さなマシンパーツが姿を現すが、攻撃力が200しかないためただの的のように見えるがそうではない。

一見的那样だがもしマシンパーツを攻撃しようものなら次のターン、攻撃したモンスターをデモニック・モーター・Ωが攻撃するという悪魔の罠なのだ、これは。

この少年、一見ただの変態のようだが意外と実力者のようだ。

「強いな・・・けどまだ負けたわけじゃない、ドロー！」

桜那の運命を決めるカードが今・・・手におさめられた。

「よし！手札から天よりの宝札発動！互いに手札が六枚になるようドローする！」

まさに神がかり的なドロー、この土壇場で天よりの宝札を引くことなどめったに出来ないことだ。

そして六枚もの手札があれば桜那はそこから一気にカードを増やす。

「俺は手札から強欲な壺発動、二枚ドロー！更に壺の中の魔術書を発動！互いにカードを三枚ドロー！これで鍵は揃った・・・俺は手札からスタンピング・クラッシュを二枚発動し伏せカード二枚を破壊し500ダメージを二回与え、フィールド魔法竜の渓谷を発動！」
デュエルフィールドが揺れ辺りが巨大な岩山に囲まれた渓谷が現れる。

「ここはドラグニティモンスター達の生まれた場所・・・故に必ず彼らは俺の呼びかけに応えてくれる！竜の渓谷の効果発動、手札を一枚捨てデッキから4ツ星以下のモンスターを手札に加える！そしてそのまま召喚、現れろ、レギオン！」

息をつかせぬ勢いでターンを進める桜那、どうやら強いデュエリス

トに出会えたことで興奮しているようだ。

憂はそれに対して苦い表情をしていた。

彼のデッキの特性上防御系の魔法罫はあまりデッキに投入できないため、彼女の行動を阻止できないからだ。

「まだまだっ！血の代償を使いドウクス召喚、そしてドウクスを墓地に送りドラグニティアームズ・ミスティルを特殊召喚しブラックスピアを墓地から装備！つづけてレギオン効果発動！装備された状態のドラグニティを墓地に送り相手のモンスターを破壊する、アキユリスを墓地へ！」

レギオンが手に持っていた赤い槍をデモニック・モーター・Ωへと投擲すると、デモニック・モーター・Ωは抵抗も出来ずに破壊された。

そしてそれだけでは終わらなかった……

「アキユリスの効果、装備されたアキユリスが墓地へ送られた時、カードを一枚破壊する。血の代償を破壊、そして死者蘇生を発動しドラグニティ・ミリトウムを蘇生、更に永続魔法竜操術発動、これによりドラグニティを装備したモンスターは攻撃力が500ポイント上がり、1ターンに一度手札のドラゴン族ドラグニティをモンスター一体に装備する事ができる。俺は手札のブランドイストックをレヴァティンに装備する！」

増やした手札を消費しつくした桜那のフィールドは完全に埋まっていた。

ドラグニティ・ミリトウム

ATK1700

ドラグニティ・レギオン

ATK1200

ドラグニティ・ドウクス ATK1500 ↓竜操術+500 ↓ドウク

ス効果+1800↓3800

ブランドイストック装備《二回攻撃》

ドラグニティアームズ・ミスティル

ATK2100↓竜操術+500↓2600

ブラックスピア装備

ドラグニティアームズ・レヴァティン

ATK2600↓竜操術+500↓3100

アキュリス装備

ブランドイストック装備《二回攻撃》

ここに竜の谷の屈強なる戦士達が揃った。

「はは・・・こんなこと有り得るのか・・・？夢を見てるみたいだ・・・」

憂がから笑にする。

仕方ないだろう、桜那の最後のこの追い上げは誰もが予想しえない事態なのだから。

あの明日香でさえも開いた口が塞がらないようで、とても滑稽であった。

「覚悟はいいな？全てのモンスターでダイレクトアタック！ドラゴンクス・エクゼキューション！」

抵抗出来ない憂に黄・青・緑・金・橙・水・黒・赤の閃光が襲いかかり、LPを喰らい尽くした。

4000↓-15800

こうしてやりすぎと言っても過言ではない第一次極秘制裁デュエルは静かに幕を閉じたのであった。

尚、余談ではあるがその後翔は完全に忘れ去られ3日間飲まず食わずで簀巻きにされたままボートに乗せられ、湖の上に放置されていた。

たところを明日香と桜那が発見し保健室に運ばれたとか・・・。

——そしてそれから数日が経ち月の無い夜、桜那のデッキケースの中に仕舞われたとある霊使いに似た女性と黄金色の鎧を身にまといレヴァテインよりも逞しく見える竜の描かれた二枚のカードがなにかに反応するかのように薄く発光していた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7380/>

遊戯王デュエルモンスターズGX—改竄された運命—

2011年10月6日10時54分発行